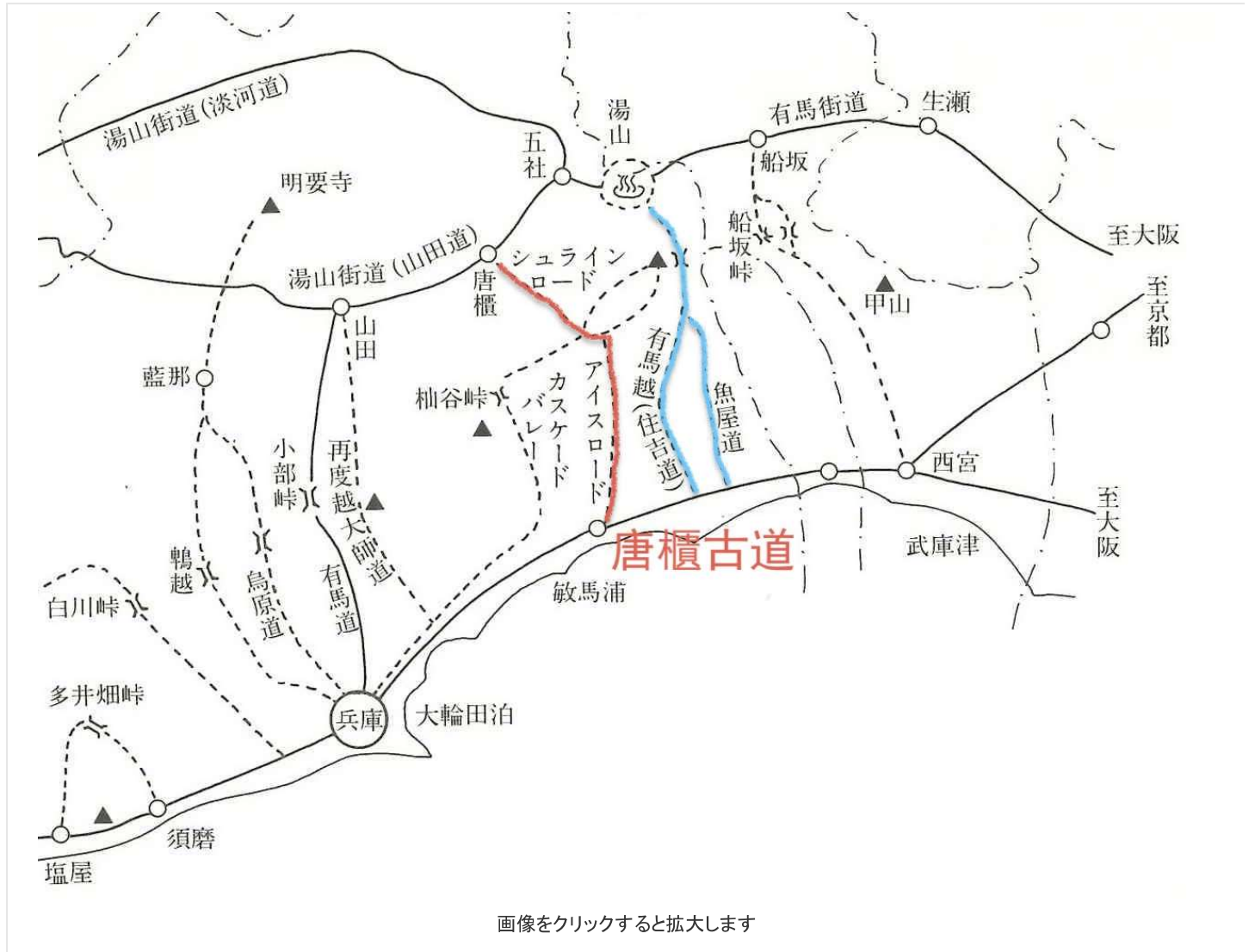


シュラインロードのお話

生活道の唐櫃道（からとみち）に設置された石仏

神戸市北区有野町唐櫃から六甲山を通り灘方面につながる道は、かつて六甲越えの「唐櫃道」と呼ばれました。1804年、この道に唐櫃村の大庄屋鍋屋太右衛門が自分たちの村と深い関わりのある修験道の開祖、役行者(えんのぎょうじゃ)を祀る祠(ほこら)を建てました。それから間もない1825年、こんどは唐櫃村の人たちが中心となって西国三十三カ所巡礼を模したミニ巡礼コースとして石仏群を建てました。石仏は魚屋さんや油屋さん、丹波杜氏(たんぱとうじ)、女中さんたちと様々な人たちが寄進して33体と番外4体の計37体が作られました。ミニ巡礼コースはお寺の地所に設置されるのが通常で、交易や生活に使われた道筋に設置されたのは異色です。

当時六甲越えは生瀬、宝塚、西宮などの通行料が必要な公道以外は認められませんでした。この唐櫃道は信仰の道、「行者道(ぎょうじゃみち)」という名のもと、間道(かんどう)(抜け道)として通行を許されました。通行するたび人々は行者堂や石仏に安全や幸せを願って手を合わせてきたことでしょう。



※図 六甲山の地理 その自然と暮らし/1988年 神戸新聞出版センター 発行/田中眞吾 編集

200年生き続けるシュラインロードの石仏